

竹と人が織り成す 幽玄な世界

11月15日・16日
江川邸 **竹灯笼祭**



想
い

3千8百本の竹灯笼が演出する柔らかな灯が来場者を魅了

今年で6回目を数える「葦山竹灯笼祭」を、国の重要文化財「江川邸」を会場に開催しました。普段は公開されていない中庭をはじめ、正門、竹林などに約3千8百本の竹の灯笼を設置。来場者は竹灯笼の温かい灯が創る幽玄な世界を楽しみました。

現代における「やっかいもの」を利用した竹灯笼

私たち日本人は、古来より竹を有用な植物として利用してきました。かごや花器、楽器など多岐にわたる



①②③定期的に放置竹林の伐採を行う竹人
④⑤一つひとつ手作業で竹を加工し灯笼に
⑥⑦点灯時をイメージしながら灯笼を設置

用途に活用できる竹は、まさに自然からの恵みであり、日本文化の伝承や人々の暮らしに欠かせない植物でした。しかし、現代ではその生命力、成長力の強さから、放置すると森林形態の破壊や人間の生活エリアへの侵食などを引き起こす「やっかいもの」として扱われています。この祭の本当の目的は放置竹林の

整備にあります。祭の主役である竹灯笼は、荒廃した竹林を整備したときに生まれる「やっかいもの」を利用して作られたものです。

竹のあり方を見直す機会に

神奈川県内で竹林整備を手掛けるNPO法人「日本の竹ファンクラ

ブ」。その活動に呼応するように立ち上がった地元有志「葦山金谷の里夢くらぶ」。この二つの団体の協力により、この祭は成り立っています。両団体の活動概念は「日本の里山を守りたい」との想いから。日本の竹を想う彼ら竹人は、この祭に訪れる人たちに「現代における竹のあり方」を見直すきっかけにしてほしいという想いを込めて、幽玄な空間を創り出しています。竹人の想いと、竹の持つ温もりが織り成す空間は、見る人を愉しませると同時に、現代における竹のあり方を皆さんに問いかけています。



愉
しむ

⑧優しい明かりに自然と顔がほころぶ ⑨水面に映る明かりはより一層幻想的な空間を演出 ⑩さまざまな種類の灯笼で来場者を魅了 ⑪富士山を模した灯笼に足を止める来場者 ⑫伊豆の国市を描いた長岡南小児童作品

